

みんなで語る会報告書

- 開催日時：平成28年11月29日（火）（19時00分～20時30分）
- 開催場所：中央公民館
- 参加者数：【市民】26人、【市職員】市長ほか10人、【総計】37人

○ 会次第

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 地方創生について
- 4 意見交換
- 5 地域代表あいさつ
- 6 閉会

○ 意見交換の内容

【市民】

砂楽の隣のホテル跡地は、廃墟になっている。観光客も寂れていると感じると思うが、どうにか出来ないものか。

<市長>

3.11の東日本大震災後、耐震改修等の条件を満たさないとできない。今、砂楽の下の海岸整備が始まっているので、それと併せてやりたいというのが偕楽園オーナーの考え方のようなものである。砂を持って来て昔のような海岸を整備して、大きな波を受けたりすることがないように工事をして3年経つが、10年計画ですることになっている。先は長い、オリンピックの頃までに一部分だけでもできないかお願いしてある。

何度かお願いしているが、持ち主がその気にならないとできない。そのような意見があったことは伝えたい。

【市民】

指宿市の重点的なプロジェクトについて、具体的に教えてもらいたい。また、その目標と成果はどのようになっているのか。

<副市長>

オクラ等の地域資源を活用して、それがいかに健康に役立つかの実証事業をしている。現在、オクラパウダーの実証実験を進めており、血圧効果がどの程度あるのかを実証できれば、オクラの粉末を活用した新しい食材を作り、機能性部分を表示し、地域の特産品として活用できないかという考えである。

既に、オクラパウダーを使ったオクラかるかんを製品化している事業所もある。それも、指宿産オクラのかるかんということで売り出そうとしていて、そこに新しい機能性部分が証明されれば、健康という視点で新しい付加価値を付けて売り出すことができる。

先日は、指宿の食材を使った健康料理メニューコンテストを鹿児島女子短期大学で開催し、そこでグランプリを取ったレシピを市内の食育に広める取組を進めていく。

健幸“この指とまれ”プロジェクトは、運動と食育という視点を交えて、それに加えて第一次産業である農業の方々を含めて一体となった取組を進めている。まだ2年目であるので、成果が出るのはもう少し先になると思う。オクラには美容効果もあると聞いているので、そのようなものもこれからやっていきたい。

<市長>

指宿では医療費が上がっており、国民健康保険の1人当たりの1年間の医療費が41万円から42万円だったと思う。1番少ない西之表市は30万円くらいである。15,000人対象者がいるとすれば、15億円の差があるということになる。健幸ということで元気で長生きをするまちにすると、少なくとも医療費分を教育や福祉等、いろいろな部分に回せる。みんな元気で健康になろう、食べて動いて健康になろうというのが、このプロジェクトである。

あと一つは、新聞でも話題になった、地熱の恵み活用プロジェクトであった。外国人はファッションとして刺青をしており、日本の温泉文化に合わずに入れない。そのような人たちが水着で入ることができ、地熱を利用した益金で地域の振興に役立てようというものであったが賛否両論あり、市民の意見を聴きながら今後進めていくために凍結をした。事業をしようとする賛否あるのは当然であるので、どう理解を得てやっていくかということだろう。

【市民】

糖尿病や高血圧症など病気を抱えており、食事いろいろと制限される。毎日、そのような食事を作ると女性は大変だということで、週に2回か3回は外食をするが、食堂に行くと味が濃い。健康食材を使っても、味付けが全然駄目である。

病気を抱えた観光客も多く来られると思う。「医食同源食堂」という名称で、あそこに行けばいろいろな病気に合った食事が出るよといった食堂があると、非常にありがたいと思う。お互いの情報交換の場にもなるのではないだろうか。

<市長>

栄養の指導員がいて作ってというような食堂が集落にあると、本当に健康になるのかもしれない。そういう場のモデル的なものを造ってもいいのかなど、すばらしい意見をいただいた。

【市民】

市内には高校が3校あり、毎年、新卒が出るが、地元に残る子が果たして何人ぐらいいるのか。また、地元の企業に就職する子が何人ぐらいいるのか。増やすための対策や、新卒を採用した企業への助成は何かあるのか。そうしなければ、雇用の創生は難しいのではないだろうか。

もう一つは、地区の婦人部がなくなりそうな状況にある。婦人の力は非常に大きく、市の創生のためにもそのような団体が必要になってくると思う。

<市長>

新卒の雇用の問題については、例えば、指宿のホテルに就職したら、軽自動車を貸与するといった思い切った施策を取らないと残らないと思う。金沢では、ホテルで働いてくれる東京の方に、住宅や自動車を貸与し、子どもの保育園も優先している。もっと都会から来てもらうためには、家を準備するなど、新たな思い切った施策を行わなければならないだろう。

あと一つの女性の力については、祭りや高齢者のお祝いなどをするにも、女性の力は非常に大きい。しかし、若い方々は子育てと同時に働きに行く。働きに行かなければ生活ができない。安心して子育てができる環境づくりと、雇用や収入の安定を図らないと、女性はそれどころではない。そこを、今後は考えていかなければならないのではないだろうか。

市の方で予算を組んでするという事は大切であるが、医療費への法定外繰入れを、ここ3~4年で15億円ほど行っている。健康になって医療費を抑えることで、他のことに使えるような施策を一生懸命行っている。徐々に効果が出るのではないだろうか。

<社会教育課長>

市の女性連絡協議会があるが、会員は市内全体で170人ほどに減っている。

【市民】

それでは話にならない。校区にも団体があって、そこから市というような協議会をしてもらいたい。

<市長>

団体の力を発揮するには、適切な規模の人数がいなければならない。女性団体をどうやっていくのかというのは大きな行政課題でもあるので、今後いろいろな方に協力をいただきながら女性の活

躍の場、団体の育成に力を入れていかなければならない。

<総務部参与>

本市では、男女ともに15歳から24歳までの10年間の流出が著しい。進学先や地元の雇用といった受け皿が不足している。市内企業についての説明会も行い、何とか地元に残るような手立ても行っていきたい。

<市長>

高校を卒業する頃には、大学や就職などで多くは市外に行く。市内で魅力のある職場を作っていかなければならない。ホテル関係も昔と違い、外国人に対応できたりと働く女性もすごい。それだけ収入も安定している。市外の高校を出た方にとっても、指宿のホテルは魅力のある場にならなければならない。

せっかく指宿で教育費を使って小・中・高を出しても、よそに行くと人材の流出である。止めるためにも、魅力のある職場を作らなければならない。

【市民】

市の創生のためには、働く若い人が残らなければ話にならない。宮地区では、65歳以上が170人からいる。あと20年のうちに、この人たちがいなくなってしまう。小・中学生も33人ほどいるが、小学校1年生がようやく2～3人というところである。

<市長>

館長さん方は、そのような危機感を持っていらっしゃる。それを何とか、行政の施策の中でやるべきだという切実な願いである。

【市民】

今の問題は、コミュニティ協議会を早く立ち上げなければならない。5年、10年、20年先を見たコミュニティづくりを進めてもらいたい。柳田校区の館長さん、頑張ってください。

<市長>

全く、そのとおりである。

【市民】

指宿が進めている健幸のまちづくりは、非常にすばらしいと思う。指宿に幸せを求めて、幸せとは何かを考え、見に来るようなまちにしたい。

また、年を取っても元気な人を、どんどん活用することも考えなければならないのでは。何かやってもらおうとすると、喜んでしてくれると思う。そのような施策を婦人会も含めて考えて、食べ物、運動、温泉そしてオクラ等、指宿の力はまだまだあると思う。それをどう舵取りするか、企画するかが市の役割だと思う。

<市長>

全く同感で、元気なお年を召した方も活躍をすることで、自分の生きがいにもつながる。「朗人」が活躍する場づくりを、事業として早く取り組みたいと思う。

【市民】

指宿は、今の教育の在り方でいいのだろうか。難儀にも耐えられる人材を育成するためにも、子どもの頃の教育が影響してくると思う。学問さえできれば良いという教育の在り方だけでなく、人間を生かす教育であってほしい。

<市長>

いろんなバランス感覚の備わった子どもたちをつくらなければならない。我々が育った時代は、非常に厳しい社会だったが良い勉強をしてきた。先輩たちがいろいろと教えてくれた。それが地域の伝統であり、指宿の良さであった。しかし、それがなくなりつつある。地域の中で、子どもたちをどう育てるのか。これは、学校教育や子ども会などの団体の中でも、そのことは繰り返し伝えていかなければならない。

<教育長>

社会が目覚ましい変化を遂げているので、その時代に対応した子どもたちを育てるため、昨年度、

指宿市の5年後の教育の在り方を見据えた「教育大綱」を作った。その中には、知・徳・体の調和の取れた子どもたち、困難に負けない強い力を持った子どもたちを育てていこうということで、学校と連携を図りながら取り組んでいる。

今、中心に据えているのが心の教育であったり、故郷でいろいろなことを体験して、故郷を学ぶといった教育の計画を立てて実施している。故郷教育を通して、子どもたちが故郷を大切にすることを備えるよう取り組んでいる。

子どもたちが減ってくる中で、学校をどうするか。子どもたちの身体や心の成長も昔とは違うことを考えると、小学校6年・中学校3年という義務教育を、9年間の義務教育というくりにして、教育の内容、教え方も工夫していかなければならない。

【市民】

農業従事者の平均年齢はどのくらいか。

<農政部長>

非常に高くなってきており、65～66歳ぐらいである。若い方を入れようと国も一体となって方策を行っており、指宿市全体で5～6年前は20人ぐらいの方が新規で就農していたが、ここ数年は伸びてきており、年に30人ぐらいが就農している。

【市民】

定年で帰って来て、農業を始める方がいるというのは聞いている。

<農政部長>

そのような方々もいるが、現在、45歳以下の方に対して手厚い政策もあり、若い方々が農業を始める動機の一つになっている。農業に対する憧れを持った方々も増えてきて、平均年齢が下がってくれば良い。

【市民】

10年後に、指宿の農業従事者はプラスになるか、マイナスになるか。

<農政部長>

現在、指宿市全体で2,000人ぐらいの農業従事者がいる。10年後には、1,700人～1,800人と減ってくる。新規就農者も増えてはきているが、高齢になり農業をやめる方もいる。5年前に比べて、今も減っている状況である。

<市長>

農業は大変だというから、したがない。農業をして儲かった、おもしろかったという声が出るようには、行政を含めて環境を作っていかなければならない。指宿での農業に魅力を感じて、UターンやIターンで来る人がいることも事実である。それをPRして環境づくりをしなければならぬ。

【市民】

昔、3Kという言葉があったように、若い人たちは嫌っている。教育の在り方は、その辺りの問題もある。指宿の農業は、本当に将来のことを考えているのだろうか。農業だけでなく、建築業界においても職人が減ったり、水道工事の職人を募集しても、給料が良くても申込みがない。教育の在り方で3Kという言葉をなくすように、子どもたちの考え方を変わってもらうような取組が必要だと思う。

<市長>

市で農業や建築などの技術者を採用しようとしても、採用試験を受けてくれる人がなかなかいない。ましてや、建設業界はいろいろな技術者がおらず、10年後にはどうなるか心配していると聞く。農業も含めて全てがそのような状況であるので、これから地方創生という名の下、どのような魅力のある事業をしていくかを考えているところである。

【市民】

その地域、地域で意識を変えないことには、あんなきたくない仕事をしているのか、あんな所に嫁に行くもんかという意識を持つような職業であってはならない。

<市長>

若者が地元に着るような形を作っていかなければならない。市内で働く若い介護士の方々か

ら、子どもが病気になっても世話もできず、このような所は辞めたい。若い人が指宿で頑張って、おじいちゃん、おばあちゃんを支えよう。そのような魅力ある職場にしなければならないと言われた。福祉には、何か予算を組むように言っている。

今後、中学校・高校での実習等をとおして、正しい職業観を育てていきたい。

【市民】

ナフコ周辺の田畑が荒れているが、何とかならないものか。例えば、市が借り上げて、農業をしたい方に貸すというような方法はできないか。

<市長>

あれでは見苦しい。なのはな館の周りにも市の土地開発公社が土地を持っているが、なかなか活用できていない。そこで今後、スポーツ施設を含めて整備しなければならないと思っている。是非、何とかしたい。

今、そのような畑があったら、地権者が 20~30 人いて非常に難しい。県外の地権者の所に行っても、詳しく知らないような状況である。国としても、法的な強制力があるような取組をしたいという動きである。

【市民】

農業のトップセールスや先進地訪問に 60~70 歳の人を行かせるのではなく、これから担っていく若い人間を、そのような所で勉強させる方がプラスになると思う。

<市長>

観葉やいろいろな若い方が見に行って、このようにしてはというアイデアを出すということ。是非、その事業はやりたい。